

八月七日 陸軍上等兵

昭和二十年 八月七日 陸軍兵長

八月十二日 蘭岡出発

敦化着

八月二十三日 敦化において武装解除

九月二日 吉林に収容、以後入ソ

昭和二十四年七月二十七日 ナホトカ港出帆

七月三十日 舞鶴港上陸

七月三十一日 復員

(新潟県 中村 甲)

日本人墓地

新潟県 平原 敏夫

シベリアではいつも腹が減っていた。冬の寒さは猛烈であった。作業は連日、カンボーイ（監視兵）の構えた自動小銃の銃口と、過酷なノルマ（割当作業量）に追われてきつかった。食い物のことと、帰りたい早

く一日も早く、の思いの他、頭のなかは何もなかった。雪で糧秣の補給が途絶え、降り積もった雪を溶かして沸かした白湯をすすりながら過ごした一日は、心細く随分と永かった。三日間、全然塩分のない食事しか支給されなかった時、加速がついて目がくぼみ頬はこけ、毛穴・汗腺が紫色に腫れ上がり、一挙手一投足が難儀になり口をきくのも億劫になってしまった。

昭和二十一年十二月三十日、大晦日の前日、氷点下五十度の極寒のなか夜間作業に駆り出された。氷点下五十度は、寒いというより全身がキリキリ痛かった。こうしたなかで無念、沢山の戦友が亡くなっていった。当時から既に五十余年の歳月が流れ去り、辛かった、苦しかった抑留生活中のさまざまの事象も、その記憶はだんだんに茫漠たるものになってきている。けれども、目の当たりにしてきた何人もの戦友の死は、忘れようにも忘れ去れるものでない。

昭和二十年十一月、日時は定かでない。初めて迎えたシベリアでの冬、寒さもいよいよ本格的になると、その寒さに耐えていくだけでも、相当の量のエ

エネルギーを必要とした。日ごとに体力の衰えが自覚されるようになってきたそんなある日、恐れていた人身事故、それも死亡事故がついに起きた。被災者は隣中隊の兵隊であったが、抑留生活に入って初めてのことで、皆のショックは大変なものであった。いつ、どこで、どこから、どのように、誰を襲ってくるか分からない死の恐怖に、私たちは声もなく顔を見合わせたのであった。作業が一緒にできなかったので詳しいことは分からなかったけれども、事故は、伐採作業中倒れてきた大木を避け切れなくての災難ということであった。

その夜、宿舎の全員が参列して通夜が営まれた。募る不安で顔をひきつらせ、額を寄せ合っている心細い通夜であった。それでも位牌が作られ大根の味噌漬（誰かが千島の松輪島から持ってきていたらしい）数切れが霊前に供えられた。供物はそれだけであった。折よく宿舎内に僧職の方が居合わせ、お経を上げて仏を弔うことができた。服装はともかく、威儀を正しての読経、独特の抑揚あるうら悲しい声を聞きながら、

皆の胸の内をそれぞれに去来したのは、果たしてどんな思いであったろう。松ヤニを燃やす手製のランプが、翌朝には皆の鼻の穴を真っ黒にする煤をゆらゆら吐き出しながら、ほのかに宿舎内を照らし、うずくまっていた私たちの影が大入道となり小坊主となって、右に左に不気味にゆれていた。こうした真似事みたいであったが、葬儀らしい行いが営めたのは、この時が初めてで最後であった。

昭和二十年のある日、朝目が覚めたら宿舎内が騒々しかった。私の寝台から少し離れた所であったが、隣に寝ていた兵隊が冷たくなっていると人だかりがしていた。

そんな騒ぎもよそに、その日も「ダバイダバイ（急げ急げ）」で、私たちはいつものように作業に駆り出されていった。当時はどんな作業に従事していたか思いつかない。夕方帰ってくると、遺体は病院に運ばれたというところで、宿舎内は収容人員が一人減となっただけ、その他は全く昨夜と変わりなく、ほの暗いランプの下でわずかな夕食を済ますと横になった。栄養失

調なのだろう。毛穴汗腺の一つひとつが紫色に腫れ上がってザラザラした体、手、足をさすりながら、死とはこんなにもあっけなく性急に訪れるものなのだろうか、生とはこんなにもはかないもののかなど、思いがめぐってなかなか寝つけなかった。そうして、板敷の寝台に毛布らしいものが一枚、入ソ時持参した毛布も、衣服の継ぎはぎ用に千切られていて、いつの間にか、らしきものまで小さくなっていった。そこが私たちのねぐらであった。その硬さが、その夜は殊更に身にこたえて、幾度も幾度も寝返りを打った。同じ宿舎内の皆も、死と隣合わせの生活ともいうべき現実になにか森閑として、それぞれに物思いにふけた一夜であった。

その後聞き知ったのであるが、亡くなった方の所持品を整理したら、寝台と敷いてあった毛布の間に、二百円紙幣が四枚きちんと並べてあった、ということであった。

当時の私たちは「銭」が通用していた頃しか知らない者ばかりであったので、この八百円は大変なお金で

あった。ちなみに昭和十四、五年頃、大東亜戦争の始まる前には、千円で家が一軒建つといわれていた。現在は二千万円ほどのお金が必要なのではないか。そうすると当時の二百円札四枚八百円は、単純計算で千六百万円となり、大変な額のお金だったのである。

亡くなった方は、毎日作業から帰るたびに、所用で寝台を離れ戻るとに、その四枚の二百円札の存在を確かめ、帰国後の生活設計に夢を膨らませていたのではないだろうか。そうして、あるいは、体が不調であったにもかかわらず、入院となると身体一つで行かなければならないので、八百円を失うことになってしまふ、そんなことを恐れての無理が、ついに自らを死の淵に沈めてしまうことになってしまったのではないか。なんと、なんともお気の毒なことであった。考えてみると、兵隊がそんな大金を持っている訳がないので、樺太あるいは満州から入って来た、いわゆる地方の方だったのかも知れない。

昭和二十二年十月、発熱で入院、間もない十一月の某日、重症で寝たきりだった同室の患者の一人が、つ

いに帰らぬ人となってしまった。どんなにか、本当にどんなにか帰りたいかと思うに、どんな思いで、本当にどんな思いで息を引き取ってゆかれたのだろう。私たちは運び出される遺体を息をつめ、目で追ったのであった。大分の年配の方のようであった。ご両親、妻子もいらしただろうに。最後まで意識はしっかりしていたらしたようだ。なれば尚更にその方の胸中、私は文字にする術を知らない。

収容所で亡くなった皆さんの遺体は、全部病院に運び、解剖、縫合の後埋葬されることであった。こうしたなか、冬期は病院に運ぶ便を待つ間、丸太造りの兵舎のポーチに、カチンカチンに凍った遺体は、幾体も幾体も井桁に積みっぱなしであった。そんな光景がうそ寒く思ひ出される。

昭和二十三年に年が改まって間もないある日、退院後病院の作業隊に編入されていた私は、解剖室勤務を割り当てられた。夜明け前に解剖室のストープに火を入れ、医師たちが集まるまでに部屋を暖めておくのが役割であった。それは冬季、解剖が行われる日だけに

必要とした作業であった。

月の光が殊更に冴え渡っていたその日の早朝、私は解剖室へ出向いた。部屋に安置、というより台上に放置されていた素っ裸の、月光に青白く浮かび上がり硬直した遺体は、抑留者の誰もがそうであったように、早く、一日も早く帰りたい郷里に、そのことのみを願いつつも、無念、病で倒れたのか、それとも外傷はなかったように思うのだが、何か大きな事故に巻き込まれでもしての死だったのか、目はしっかり閉じられ、手は胸に固く合わされていた。合掌の後、その仏の傍らで薪運びなどの作業を始めた。一人でカタコトと動き回っていると……、いきなりその遺体がむくむくと起き上がってきて私に襲いかかり、その靈魂が私の魂を食いちぎって私に乗り移り、私とその遺体の身代わりにされてしまう、そんな幻想が私の脳裏をよぎり身体を突き抜け、まさに鬼気迫る思いで、思わず立ちすくんでしまった。そうして震えが止まらなかつた。月光下の台上の素っ裸の遺体、顔形は思い出せないけれども、二時間足らずの間の、私の動きから生じるわ

ずかな物音の外は、森閑と静まり返った静寂の中で、背筋をゾクゾクっと突っ走ったその時の戦慄。今でも私の身体のどこかがしっかり覚えている。

東シベリアの主要都市コムソモリスクの、アムール（黒龍江）を隔てた対岸はピワニーである。その河港の町の南九十五キロの地点、ポーニに、私の入院したソ連の陸軍病院があった。その病院に隣接した山あい日本人墓地があった。

長円形の土饅頭にロシア語のアルファベットで埋葬者が横に、算用数字を縦に死亡年月日が柱に、わびしく記された粗末な十字架が立っていた。お墓は整然と並んでいて、かぞえたはずなのだけれど、その数はどうしても思い出せない。

冬、しんしんと寒さが降りてきた。墓標を捲いて粉雪が舞い、漂う冷気は瞬時も離れようとしなかった。迫ってくるのは寒さばかり、底知れぬ静寂の中にひっそりと日本人墓地はあった。

待ちに待った春が訪れ、やがて短い夏がやってくる。一生懸命息吹く雑草の茂みで、盛土から墓標まで

が埋もれてしまいそうになった。だが表土の下は、永久に溶けることのないツンドラ（凍土帯）なのであった。

寂しい、淋しい墓地であった。昭和二十三年五月三十日、私がダモイ（帰国）に際し「さようなら」と、最後のお祈りを捧げてきた日本人墓地の佇まいである。お別れをして来てからもう随分になる。記されてあった墓標の文字は読めるだろうか。極北の地シベリアの明け暮れは正に峻烈であった。しかし、お墓、土饅頭の存在は現在果たして確認できるのだろうか。

シベリアには約六十万人が抑留され、死者はおおむね六万人と言われている。皆さんの無念さ、口惜しさは如何ばかりか。そうだろう、戦争は終わったのに、どうして、何故、殺されねば——といってよいだろうか。——ならなかったのか。

入ソ後は移動移動で人員の入替えが激しく、軍隊の規律は完全に破壊し尽くされ、筆記用具は皆無、栄養失調で思考力の衰退してしまった私たちは、残念ながら亡くなった皆さんの氏名・住所など覚えておられる状

態でなくなっていた。そんなこともあってか、抑留死された方々のうち身元の確認された方は、実に死者の半数にも至っていないという。さらに、身元の確認された方も、いつ、どこで、どのように、何故亡くなられたのか等、その実情、少なくとも正確な命日だけでもご承知の遺族、さらに、肉親の埋葬されているお墓をお参りできた方々は、果たしてどれほどおられるのか。おさむい数字なのではないだろうか。

幸運にも私は生還し今日がある。年金生活ながら老妻と二人、平穩無事な日々を送っている。毎日が平和であればある程、彼の地で亡くなられた皆さんがお気の毒でならない。

いま一度書こう。戦争は終わったのに何故死ななければ、殺されなければならなかったのか。

平成三年八月、新聞社の主催による「ソ連・極東親善の旅」に参加してきた。一度は必ずお参りしなければと思い続けてきた日本人墓地の、何カ所かを詣でることができるといふ旅程に大きな意義があった。

八月十四日、ウラジオストック。郊外のロシア人墓地の片隅にひっそりと日本人墓地があった。セメントで約一×二メートルに枠取りされたお墓が十五基程並んでいた。思わず息をのむ怪しい墓地であった。墓前に額ずき手を合わせる涙があふれた。お墓にはなんの標識もなかった。聞くところによると、一基のお墓に二十人程葬られているのだとのことであった。一人用としか思えないお墓に、二十体もの遺体がどのように埋葬されているのだろう、と思っただけ涙になっていた。同行の戦争を全然知らない人達も神妙に頭を垂れていた。戦争の悲惨な傷痕が、こんな所にも儼然と存在しているのである。

八月十五日、ナホトカを訪れた。町外れの高台に、鉄製の鎖を巡らせた柵に囲まれて日本人墓地があった。夏草の生えたゆるい斜面に、一×二メートル、幅十センチ程、セメントで枠取りされたお墓が整然と並んでいた。五百七十人の方々葬られているとのことであった。お墓の頭部に8/11、7/12などと数字が記されており、これはお墓の管理ナンバーではないかとのこ

とであった。下方に楷書の日本文字とそれに並べてロシア文字で、埋葬者の氏名が刻まれた小さな金属板がはめ込まれていた。ナホトカは帰国墓地で、私たちがこの港から故国日本へ向かったのである。帰国を目前にしてどうして亡くなってしまわれたのか、その胸のうちを私は文字にしようもない。緑の樹木に視界は遮られていたけれども、斜面の尽きた所は海であった。日本海なのである。その向こうに日本が、郷里があった。

八月二十一日、バイカル湖のほとり、リストビヤンカ村の日本人墓地の参拝にゆく。墓地は、真新しい木造りの柵に囲まれ、正面入口には門まで造られていた。墓地の中央に立派な石碑が建っていた。石碑には日本語で「リストビヤンカ日本人墓地」と刻印された金属板と、六十人の埋葬者の名前が片仮名で刻まれた金属板の二枚がはめこまれてあった。その碑のまわり、夏草に覆われた敷地内に、ロシア語で埋葬者の氏名が記された、T字形の墓標の立ったお墓が点在していた。夏草に埋もれそうになったお墓は、土饅頭の盛土は半

ば崩れ、立派な石碑、門まで備わった柵とは対照的にわびしくもの悲しいものであった。そうして五十年に近い厳しい歳月の経過を如実に物語っていた。冬には五メートルも結氷するというバイカル湖のほとりの寒村に、ひっそりと日本人墓地はあった。寂しい墓地であった。

同日午後、イルクーツクへ。イルクーツクの日本人墓地は、ロシア人墓地に向かい合うような形で、木の間がくれにひっそりとあった。敷地の一面に無念、本当に無念にも亡くなられた人たちのご冥福をお祈りした碑、プレートなどが建っていた。折しも降り出した小雨に煙る墓地は、そくそくと迫ってくる何かがあった。

タイシュェット（第二シベリア鉄道の建設拠点）で死亡された兄さん、叔父さんの霊を慰めたいと、名古屋から参加して来られた親子（亡くなられた方からは妹と甥になる）が一緒であった。二人はタバコに火をつけ、お酒を慰霊碑にかけて、じっと手を合わせたまま、いつまでもいつまでも動こうとされなかった。この度

の旅行で、タイシエットに一番近いところ、イルクーツクの墓地でお祈りを捧げ、御霊をお慰めされたのであった。

お墓には一基一基番号が付され、埋葬者の氏名が日本語で刻まれた金属板がはめ込まれてあった。けれども、お墓は〇・七×一・三メートルくらいと小さく、私が窮屈な思いをされているのではないかと気になった。

八月二十三日、ハバロフスク。空港へ向かう途中、ロシア人墓地の一隅に鉄柵に囲まれて日本人墓地はあった。墓地の中央に、新聞、テレビなどの報道写真で度々目にしてきた「日本人墓地」と刻まれた石碑が建っていた。ハバロフスクはロシアの中で日本人が最も多く訪れる所である。従って墓地の参拝者も大勢いたようである。石碑の前はお花で埋まり、沢山のロウソクが灯され、線香が白い芳香をゆらゆらなびかせていた。額ずき目をつむると、かつての抑留生活の思い出のあれこれが、走馬灯のように頭のなかを駆けめぐった。ここのお墓も〇・七×一・三メートル程と小さく、そ

れぞれに埋葬者の氏名の刻まれた金属板がはめ込まれてあった。こうしたお墓が累々と、正に累々と並んでいた。中央石碑の近くに、百十一人と六十九人の氏名の刻まれた二つの大きな墓碑が、そこそこの広さでコンクリートに囲まれた地所の中程に建っていた。百十一人、六十九人も遺体が、とても丁重に葬られているとは思えないスペースを、どのように考え受け止めればよいのだろう。

シベリアに入って初めて迎えた冬、昭和二十年暮れから二十一年にかけての冬に、最も沢山の戦友が亡くなっていった。これはかつて新聞で公表されたシベリア抑留死没者名簿を見れば一目瞭然である。その方々を葬るのに必要なお墓の穴掘り作業は、最重労働であった。凍りついた大地は、先の尖った鉄棒もてんで受け付けてくれず、大勢の死者を個別に葬るのに必要な数のお墓が確保出来ず、ついに一括処置せざるを得なかった。私の意地悪な憶測である。

石畳の参道から一步踏み込むと墓地は夏草に覆われていた。一基一基、個別に造られていたお墓に刻まれ

た埋葬者名を黙読しながらいくと、「生きて帰れてよ
かったな、おれも早く帰りたいよ」と、お墓の中から
声がかかったように思えてきて胸が痛んだ。親善、と
いうより私にとっては墓参の旅、に参加して来てから
もう六年が経った。

いわれなきシベリア抑留。寥々、広大なシベリアの
山野のどこかに、未だに放置されたままの万を超す遺
体が、じっと、じっと、ひたすら帰国の日をお待ちで
ある。

シベリア抑留の悲劇。絶対に、絶対に繰り返しては
ならない戦争の、哀愁切々、歴史に刻まれた痛恨の一
こま、消えることのない慟哭の一言である。

【執筆者の紹介】

出生地 新潟県加茂市上町七三〇番地

本籍地 新潟市白山浦新町通十三

生年月日 大正十一年九月二十九日

職 歴

昭和十三年三月二十日 新潟県立三条商工学校商科

卒業

三月二十六日 新潟市上大川前通六番町

(株)清野屋に入社

昭和十六年十二月十四日 徴用令により(株)中島飛行

機製作所武蔵野工場に入所

軍 歴

昭和十八年九月二十八日 新発田部隊に臨時召集

昭和十九年二月十七日 新発田を出発、青森―函館

を経、小樽へ

二十五日 小樽港を出航―大湊軍港

に至り船団を組む

二十八日 駆潜艇二隻の護衛のもと

に同軍港を出航

三月十三日 中千島、松輪島に上陸

勲第一一九〇五部隊

歩兵第五百五十八連隊第三大

隊第九中隊

米軍より艦砲射撃、空襲な

ど再々攻撃を受ける

昭和二十年八月十五日 終戦

八月二十五日 ソ連軍松輪島に上陸

九月二十六日 ソ連差し回しの船で松輪

島を離れる

シベリア

昭和二十年九月二十九日 払暁シベリア、ソフガワ

ニ港に上陸

九月三十日 夕刻ソフガワニ、ピワニー

間四百五十キロ

ピワニーから三〇八キロ地

点、一三〇収容所に収容さ

れる

昭和二十一年五月十八日 トムニー(?)に移動、

鉄道工事、道路建設

八月三十日 ピワニーから一〇五キロ

の地点、一〇三収容所へ移

動、鉄道工事に専念

十月十七日 一一七キロ地点、一〇四

収容所へ移動、鉄道工事、

製材作業

十二月三十日 夜間作業で氷点下五十度

を体験

昭和二十二年四月十五日 一〇三収容所へ移動

五月二日 九七キロ地点、一一一収容

所へ移動、伐採、藪出し作

業に従事

八月中旬 十五日間共産主義受講のた

め一〇八収容所へ

十月八日 発熱 九五キロ地点ボーニ

陸軍病院に入院

十一月十九日 退院 病院の作業隊に編

入される

カントーラー(ソ連側事務

所)勤務

昭和二十三年五月三十日 病院を出発

六月四日 ダモイ(帰国)中間基地フ

ンガリーを出発

六月十日 ナホトカに到着

帰国

昭和二十三年六月二十一日 ナホトカ港を出航

(永徳丸 第二十一梯団)

一九九八人)

二十四日 舞鶴に上陸

二十七日 舞鶴を出発、京都を経

二十八日 新潟県南蒲原郡加茂町

(現在加茂市)の生家に

帰着

帰国後

昭和二十三年九月二日 (株)清野屋に復職

昭和三十三年七月二十八日 現住所に転居

昭和六十三年三月三十一日 役員定年により退社

現況

息子は独立、現住所で妻(昭二・一〇・一〇生)

と二人、年金生活ながら平穩無事の日々を送り、今日に至っている。

平成三年八月、新潟日報社主催による「ソ連・極東親善の旅」に参加。ウラジオストック、ナホトカ、

リストビヤンカ、イルクーツク、ハバロフスクを回り、それぞれの日本人墓地を参拝してきた。

(新潟県 中村 甲)

シベリア抑留体験記

福井県 井上 博夫

昭和二十年八月九日、私は北満山^{シベリア}神府騎兵隊下士官候補者隊にて日ソ開戦の報と同時に山神府の軍人軍属の家族輸送の任務をもって内地へ帰還を命ぜられ、即刻客車四両に家族の方々と多くの物資を積み南下しました。車窓から原隊元の^{アイボン}環瑠六二二部隊にも別れを告げ、懐かしく最敬礼と捧銃をして通過。もうこの時既に元の同胞はソ連と戦いを交え、自らの手によって火を放っていたので、私は赤々と燃えている兵舎を眺めながら南下し北安まで来ました。

ところがちょうどこのとき雨に見舞われ、川の増水により鉄橋を通過することが出来ず、一晚様子を見る